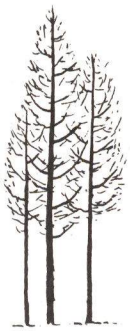
No.

響

新交響楽団第121回演奏会

アマチュアオーケストラ



Bartók

バルトーク○舞踊組曲

Strauss

リヒャルト・シュトラウス○オーボエ協奏曲



Brahms

ブラームス○交響曲第4番ホ短調



指揮●森山 崇

オーボエ●柴山 洋



1988

10.16(日)

昭和女子大学人見記念講堂

(東急新玉川線三軒茶屋駅下車5分)

2時開演

S2000円・A1500円・B(自由席)1000円

お問合せ・お申込▼コンサートサービス☎03(263)3858

お申込み▼チケットぴあ☎03(237)9990

▼チケットセゾン☎03(980)9990

IMAO

新交響楽団（アマチュアオーケストラ）第121回演奏会

指揮：森山　崇

オーボエ独奏：柴山　洋

バルトーク：舞踊組曲

Bartók Béla : Táncszvit

リヒャルト・シュトラウス：オーボエ協奏曲

Richard Strauss : Konzert für Oboe und Orchester

―― 休　憩 ――

ブラームス：交響曲第4番ホ短調

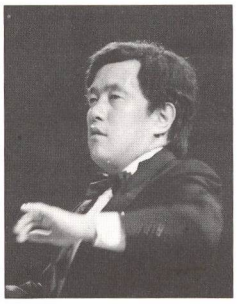
Johannes Brahms : 4. Sinfonie e-moll

1988年10月16日（日）14：00

昭和女子大学人見記念講堂

●指揮

森山　崇



1946年生まれ。1966年早稲田大学理工学部入学と同時に同大学交響楽団に所属、ティンパニ奏者およびトレーナーとして活躍した。山岡重信氏、故福富俊一氏など多くの先輩より多大の影響を受ける。また打楽器を野口力氏（読響）、作曲を飯田隆氏に師事。指揮は特に師事した人はなく、「レコードや演奏会で接する指揮者はすべて先生」とは本人の弁。本業は印刷会社に勤めるサラリーマンという、純然たるアマチュア。現在高田馬場管、早稲田大学フィル、新潟大学管、新潟室内合奏団および新響で指揮者またはトレーナーをつとめている。オーボエの柴山氏とは早大で同期。

●オーボエ独奏

柴山　洋



1948年生まれ。オーボエを鈴木清三氏に師事。早稲田大学中退。その後桐朋学園に学ぶ。1970～1976年東京交響楽団、1977～1985年新日本フィルハーモニー交響楽団に在籍。共に首席をつとめる。新日本フィル定期演奏会等で数度ソリストとして同楽団と共演。退団後はフリーの演奏家として、また管楽器専門誌にリード調整に関する記事を執筆するなど、すべての音楽のジャンルで活躍している。桐朋学園大学講師。新響では管楽器トレーナーをつとめている。理系出身ゆえの（？）かゆい所に手の届くキメ細かなトレーニングぶりは新響でも定評がある。

新響はアマチュアの定義を「シロウト、すなわちプロよりヘタな人」とはしていない。アマチュアの語義の通り「好きでやまない人」だと解釈している。大げさかもしれないけれど、原始、音楽はアマチュアのものだった。奏法なんて、なかった。私事で恐縮だが、中学の時の社会科の先生は最後の授業でハーモニカを逆に構えて吹いた。みんな目を丸くするほどうまかった。軍隊時代に満州で自己流の吹き方で始めたと聞いた。

新響が今日の演奏会の指揮者を決める会議を開いた時、いろいろなプロの指揮者の候補に混って、ずっとトレーナーをつとめてきた森山さんの名前が上がった。検討を重ねた結果、その「音楽を創り上げる力量」を評価して新響は森山さんを選んだ。

森山さんは印刷会社に勤めるサラリーマンで、皆さんが手に取られているこのプログラムの文字も森山さんが1字1字電算写植で打ったものだ。ポスターの納品のその足で指揮台に上がる人は日本中見わたしてもそれ程いないのではないだろうか。

しかし、アマチュア先進国である欧米を見てみると…。ボストン交響楽団の首席ヴィオラのファインさんは入団する前はNASA（航空宇宙局）の研究員だったし、マーラーと聞けば世界を駆けめぐる米国金融雑誌社社長のキャプランさんはカーネギーで「復活」を指揮して大成功をおさめ、またイギリスでは元首相も棒を振っている。誰も彼も隠居の義太夫や文部大臣の始球式とはワケが違う。

これからは、プロも含めた広い意味でのアマチュア＝愛好者の時代かもしれない…。　①

●アラーム付時計をお持ちの方はアラーム・時報の解除をお確かめ下さい。

バルトーク「舞踊組曲」

1945年、第２次大戦終結の年にニューヨークでこの世を去ったバルトークの遺骨が43年経った今年になって生地ハンガリーに「里帰り」し、ブダペストで盛大な国葬が営まれたというニュースは記憶に新しい。

バルトークの生まれたナジセントミクローシュという小村は現在ではルーマニア領の西端に位置しているが、この周辺は最近になってルーマニア系住民とハンガリー系住民の対立が大きくなるなど、社会主義国家内部での人種問題として注目を集めている地域でもある。

もともと東方民族であったマジャール人の国ハンガリーは、現在でも自らの国名の表記を「マジャール」としている。この国では例えば人の名前をとってみても日本と同じように姓・名の順で書き表わしている（ハンガリーでは「バルトーク・ベラ」という）など、古来から東方とヨーロッパの接点としての特異な地域であった名残りが現在でもいろいろな部分で見られる。

このように複雑で独特な歴史的背景と民族文化を持ったハンガリーに育ったバルトークは自らの国の民謡などの中に古くから伝えられてきたリズムや旋律にこだわり、民族的作風をもつ曲を多く遺した。これは本日演奏する「舞踊組曲」にも顕著に表われている。

「舞踊組曲」はドナウ川をはさんだブダとペストの両都市が合併して現在の首都・ブダペストとなってから50周年を記念する式典のためにハンガリー政府が委嘱、1923年（日本では関東大震災の年）に作曲されたもので、全部で５種類の異なった舞踊曲から成っている。

第１曲　モデラート　ファゴットによる特徴的なモチーフが現われ、半音階的断片が拡大されて旋律になっていくというバルトーク個有の手法が見られる。アラビア的雰囲気をもつ楽章。

第２曲　アレグロ・モルト　変拍子を伴ういかにもハンガリーの農民舞踊的な曲。短３度音程の２つの音が印象的なモチーフを呈示する。

第３曲　アレグロ・ヴィヴァーチェ　これもハンガリー風舞曲だが、ペンタトニック（５音音階）を用いたどことなく中国的な空気も漂っているオリエンタル楽章。

第４曲　モルト・トランクィロ　５度音程を積み重ねた和音の中を木管楽器の旋律が静かに現われる。

第５曲　コモド　低いドラの響きの中、同じ音型がくり返されるルーマニア風舞曲。

終曲　アレグロ　前曲から続いて切れ目なしに始まる（他の楽章間もフェルマータを境目に続けて演奏される）。トロンボーンが第１曲のテーマを奏するが、これが第２曲のテーマに変形されていく。テンポが小刻みに変化し、場面展開が速い。最後はアレグロモルトで輝かしく終わる。

（Perc. 今尾　恵介）

リヒャルト・シュトラウス「オーボエ協奏曲」

ピアノやヴァイオリンの協奏曲には名曲といって多くの人から親しまれる曲が少なくないが、誰でも知っている木管楽器の協奏曲は以外に少ないのである。ピアノやヴァイオリンは協奏曲の数も多いし、その分名曲も多い。演奏家も多いし、楽器の生産数だって多い。一方、木管楽器はというと、実につつましやかである。この木管楽器の協奏曲の中でもオーボエの協奏曲などと言うと、まさに「通」のための音楽と思われているようである。実際この「通」なる者は、たいがいオーボエをたしなみ、時としては誰とかの協奏曲はあそこの指づかいが難かしいとか、ここの所が危険いっぱいだとか、よくもまあというぐらいよく知っている。ここまでくると「通」というよりも「同業者」と呼ぶべきなのだろうか。いずれにしても、狭く、深く愛されている、これがオーボエ協奏曲というものなのである。しかし、この「通」はこう言うのである。ピアノやヴァイオリンは「ゆびづかい」や「ゆみづかい」で音楽をするが、我ら木管族であるオーボエは、人間の最も基本的で、感情を表現しやすい「息づかい」で音楽をするのだ。わかるやつだけがわかればいいさ…などと。この態度が世界を狭くしていないかとちょっと気になっているのだが…。

という訳で、リヒャルト・シュトラウス作曲のオーボエ協奏曲。協奏曲の中にはもちろん独奏の部分(solo)と全体で合奏する部分(tutti)があるが、忘れてならないのはいわゆる「からみ」である。聴き手にとっては、かっこいい solo、派手な tutti というのは十分聴きごたえのあるものだが、演奏する側にとって、何が楽しいと言って、この solo との「からみ」程楽しく危険がいっぱいなものはない。このオーボエ協奏曲には、それが実に多いのである。本来この「からみ」というかアンサンブルは互いに顔を見合せられ、さしつかえない範囲で息の声の聞こえる近さでするのが基本なのである。ところがなんとこの協奏曲でのソリストとの「からみ」は、顔はみえない、遠い、息がわかりにくいという三重苦の中で楽しまねばならないのだ。その辺も楽しめる聴き手は、すでに「通」の域に達したことになる。

さて第１楽章、アレグロモデラート。「ドレドレ‥ドレドレ‥」とチェロで始まるこの何かをうながすような、何かが動き始めるような、印象的な節に誘われるようにsoloオーボエの主題が響く。これを秋風のようにさわやかな、ととるか、リヒャルト・シュトラウスらしい動きととるか。ここから先の曲目解説は聴衆の皆さまの耳と感受性におまかせする。構成はこのあと第２楽章、アンダンテ、第３楽章、ヴィヴァーチェであり連続で演奏される。オーボエ吹きなら一度は吹けてみたい曲の一つである。今日はこの「通」の音楽を十分楽しんでいただきたい。

（Ob 諏訪内　尚克）

ブラームス「交響曲第４番」

1884年、51歳を迎えたブラームスは、６月の末近くウィーンの西南のシュタイヤーマルク地方のミュルツツーシュラークに、避暑と夏の創作活動のために滞在し、そこでこの最後の交響曲の第１及び第２楽章が作曲された。この年には交響曲の作曲と並行して多くの歌曲の筆が進められているが、その中の作品96、97はその前年に知り合い、そして既に老境に近づきつつあったブラームスを魅了した26歳の歌手、ヘルミーネ・シュピースに贈られている。

その年の10月にブラームスはウィーンに戻るが、翌年５月に再びミュルツツーシュラークを訪れ、今度は交響曲の残された楽章の作曲に没頭し、まず第４楽章が、次いで第３楽章が書かれ、２年越しにようやく全曲が完成される。そして同じ年の10月に、ハンス・フォン・ビューローの協力を得て、作曲者自身の指揮によりマイニンゲンで公開初演された。その時には第１及び第３楽章が好評を博しアンコールされたと伝えられている。

ところでブラームスは、古典派以前の音楽とその形式に郷愁に近い感情を持っていた。

そしてこの「第４交響曲」では、そのような古い時代の音楽とその語法に対する彼の愛着が、ブラームス流の新しい表現の上に、秘められた野心として示されている。例えば全体的に対位法を多用し、第２楽章では古い教会音階であるフリギア旋法を使い、終楽章でもバロック時代の形式であるシャコンヌの手法が用いられている。

このような古い語法をとっていることから、この交響曲ではブラームス一流の枯淡の味や、憂愁、諦観が一層強められており、聴く人に美しい秋の一瞬を想わせる。

第１楽章　アレグロ・ノン・トロッポ　ホ短調 2/2拍子

限りない哀愁を秘めた楽章で、晩年を迎えつつあるブラームスの寂しさと孤独が聴く人に迫る。曲は序奏を置かずに第１、第２ヴァイオリンが第一主題を奏し、聴く人を静かにブラームスの世界に誘う。演奏する場合、その音色と、作曲者により付された細かな表情に対し、深く神経を払う必要がある。

この楽章は第１主題と、対照的なたくましい性格を持ったホ長調で現われる第２主題とが中心に構成されたソナタ形式をとっている。堂々たるコーダは第１主題をもとにして終結感を強め、ティンパニの力強いひびきと共にこの楽章は結ばれる。

第２楽章　アンダンテ・モデラート　ホ長調　6/8拍子

まずホルンでフリギア調の素朴で味わい深い旋律が歌われる。この旋律は木管群に引き継がれ発展し、さらにヴァイオリンがこの主題を変形して甘美な別の表情を加えてゆく。

第２主題は１回目はチェロにより *dolce* で表情豊かに、そして楽章の後半ではヴァイオリンにより *espressivo* で歌われるが、この部分は作品前半の白眉でもあり、ブラームスの音楽の熱き血潮が感じられる。

第３楽章　アレグロ・ジョコーゾ　ハ長調　2/4拍子

ジョコーゾ(*giocoso*)は「おどけて」「愉快に」の意。一種のスケルツォであるが2/4拍子で書かれている。ブラームスの交響曲の中間楽章としては、やや異色の音楽ともいえる。この楽章になってピッコロ、Ｃクラリネット、コントラファゴット、トライアングル等が加わり、賑やかな響きを強める。この粗野に近い歓楽気分もまた、ブラームスの一面である。

満を持した新響のブラスセクションが活躍する。

第４楽章　アレグロ・エネルジコ・エ・パッショナート　ホ短調　3/4拍子

この楽章では、バッハが1712年以前に作ったといわれるカンタータ150番「主よ、われ汝にのぞむ」の中のシャコンヌの主題が使われている。シャコンヌとは、ゆるやかな３拍子の舞曲で、バスの短い主題がくり返され、その上に変奏を築いたもので、この楽章では31回くり返される。その反復の上に、ブラームスの作曲技術を駆使した入念な変奏が、時には明るく牧歌的に、時には悲痛にと多様に表現されている。楽章の終結部はピウ・アレグロとなり、シャコンヌの主題が用いられながら、力強い *ff* で全曲が結ばれる。

ブラームスは1885年に「第４交響曲」を完成させたのち、それに続く「第５交響曲」の構想を練ったが、それは結局実現に到っていない。1877年の「ヴァイオリンとチェロの二重協奏曲」は、当初第５交響曲として着想されたものといわれるが、この協奏曲が管弦楽を用いた最後の作品となった。

それでは、深まりゆく秋と共に新響のブラームスをゆっくりお楽しみ下さい。

（Vn. 伊藤　耕平）

Asahi
LIVE ASAHI FOR LIVE PEOPLE
アサヒビール

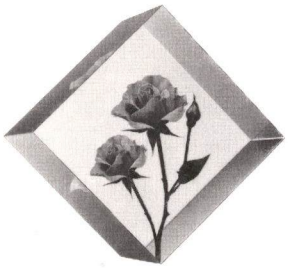
コーヒーが香る、新しいノバ。

NOVA®



新発売 ●マイルドコーヒー(250g) ●ブレンドコーヒー(250g) ●スーパーノバブレンド(190g) ●キリマンジャロストレート(190g) ●コロンビアストレート(190g) ※いずれも希望小売価格100円です。

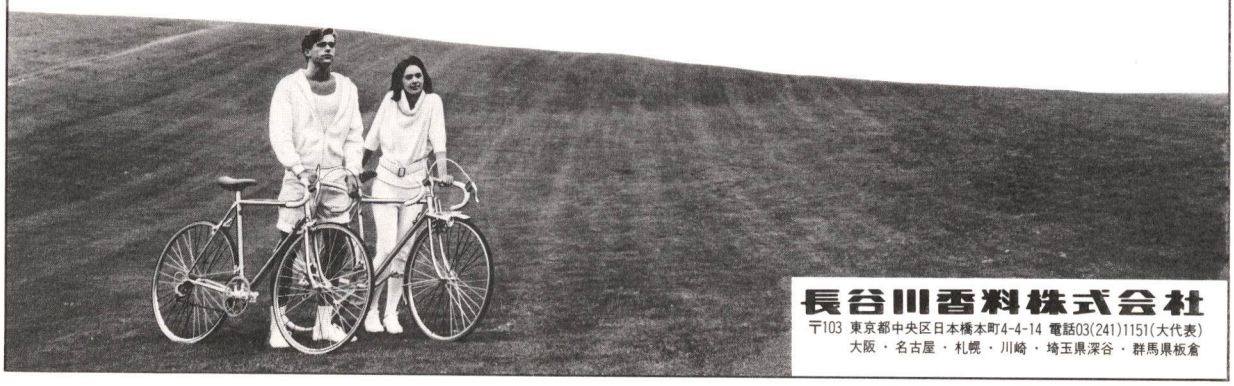
アサヒビール株式会社



さまざまな技術がモノを生み、新しい暮らしを
切り拓いていく時代——。
香りはモノに生命をそそぎこみ、ヒトの心に
鮮やかな想いをひろげる泉のようなもの。
私たち長谷川香料は、香りの世界を探求して80年。
豊かさとは何かをつねに考えながら、
人と人との出会いの香りを創りつづけます。

香る時代を創りたい。

香りこそ、人間の文化なのだから。——長谷川香料



長谷川香料株式会社
〒103 東京都中央区日本橋本町4-4-14 電話03(241)1151(大代表)
大阪・名古屋・札幌・川崎・埼玉県深谷・群馬県板倉


音楽、すくすく。
著作権が育てる、
かけがえのない音楽
植物がすこやかに育つには、水や光が必要なように、音楽がすこやかに育つには、著作権がしっかりと守られることが大切です。
JASRACはやがて創立50年——ひたすら著作権を守り、音楽を育てていきます。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川 也寸志
〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551